

島の子供たちと菅島灯台

キーワード 離島、菅島小学校、島っ子ガイド、菅島灯台、漁業、地域観光

灯台の観光資源化と菅島灯台の歴史

①伊勢志摩における 灯台の観光資源化の課題

灯台の果たしてきた航路標識としての役割が薄れつつある近年において、人と海をつなげ、海洋文化を受け継ぐシンボルとして、灯台の存在価値を新たに見出す必要がある。2018（平成30）年、海上保安庁の海上安全政策の方向性などを示した第4次交通ビジョン¹において、重点的な取組事項として灯台観光振興支援が挙げられ、地域振興に向けた灯台活用について中間とりまとめが公表されている。これによれば、同年「灯台ワールドサミット」が三重県志摩市において初開催され、志摩市、銚子市、御前崎市、出雲市の四市長により、歴史的灯台の観光資源としての価値の活用と、それを次世代に引継ぐために連携する旨の覚書が結ばれている。

実際、三重県の伊勢志摩地域へと人々を呼び込むための観光資源となっている事例は多くあり、多くは、展望施設としての機能と、歴史や建築構造、光源やレンズの種類など、専門家による解説パネルがほとんどである。不特定多数の訪問者に対して、こうした活用方法は効率的で、運営に関しても現実的といえる。しかし、観光による地域振興においては、地域への波及効果が求められる。灯台の観光利

用に関しても、地域と灯台をより深くつなぐためには、地域住民の参加によるコミュニケーション戦略と、過去の歴史だけでなく、地域と灯台の新たな物語が必要である。

ここでは、灯台の価値を伝える仕組みについて考察することを目的に、灯台の新たな物語づくりを担う三重県鳥羽市の菅島灯台と菅島小学校の取組の事例紹介をしたい。

②菅島灯台の歴史

菅島は、伊勢湾口に位置する鳥羽湾にある4つの有人離島の1つである。周囲約12k m、東南は太平洋に面し、東側には神島、北側には答志島、西側には坂手島があり、4つの島を結んだ湾が鳥羽湾となっている。鳥羽の島々の地質は岩盤のため、海域においても岩礁が多く、江戸時代には海運業の西廻り航路の発展に伴い、菅島付近で難破する船が続出していた。当時の船乗りたちから「鬼ヶ崎」と呼ばれるほど難所であった。河村瑞賢^{ずいけん}が幕府に標識の必要性を上伸したことも後押しとなり、菅島村東北端のしろヶ崎^{おかがりどろ}に篝火（かがり）火を焚き目印とする「御篝火」が建てられた。これが菅島灯台の前身である。

江戸時代末期になると、英国等の外国と結んだ通

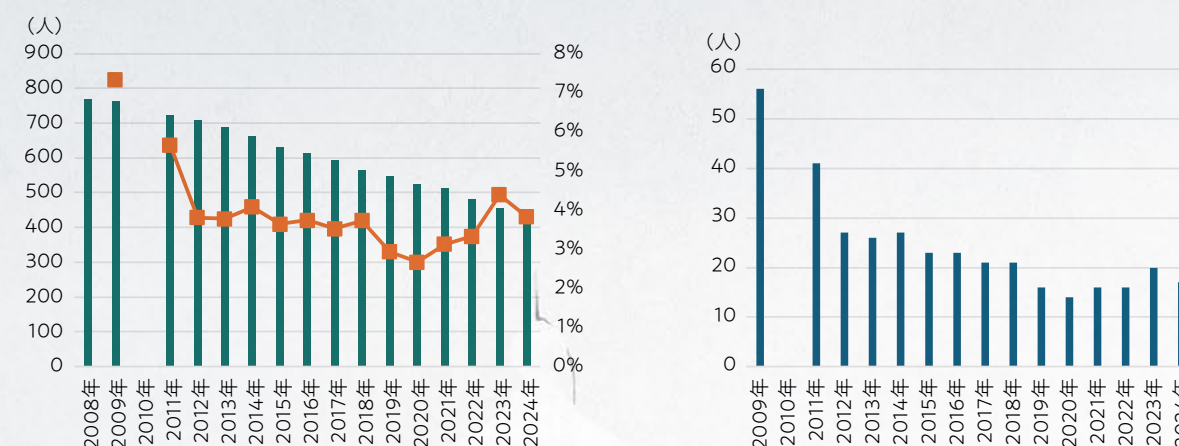


図1. 菅島人口と小学生比率推移 出所:鳥羽市資料より、筆者作成

図2. 菅島小学校児童数推移 出所:鳥羽市立菅島小学校

航条約に沿って、西洋式灯台の建設が始まった。菅島灯台は英国人技師リチャード・ヘンリー・ブラントン（1841-1901）の設計で建設され、1873（明治6）年7月1日に点灯された。同年7月8日の就工式には参議「西郷隆盛」以下政府高官が出席したともいわれている。現在、菅島灯台は、日本初の円形レンガ造りで現存する日本最古の灯台で、2023（令和5）年9月20日、重要文化財に指定されている。このレンガは、三重県志摩郡渡鹿野島の瓦屋、竹内仙太郎が焼いたものである。レンガの輸入が許可されなかったことから、ブラントンは竹内にレンガの制作をさせた。

島っ子ガイドの取組

①菅島の概要

菅島の主要な産業は漁業で、天然・養殖ワカメ加工業、刺し網漁、一本釣り漁、クロノリ養殖が行われている。また、それに伴い、クロノリの加工場もある。鳥羽磯部漁業協同組合菅島支所の正組合員は58人、准組合員117人で、合計175人の組合員がいる。ほとんどの場合、1世帯1人の組合員であるため、2024（令和6）年11月現在、207世帯の菅島では、

ほとんどが関係漁民である。

菅島の人口は、減少傾向で、2008（平成20）年には763人だったが、2024（令和6）年には444人まで減っている（図1）。同時に菅島小学校の児童数も減少しているものの、2020（令和2）年を底に微増している（図2）。

②島っ子ガイドの概要

現在、菅島小学校の児童が一年に一度全校児童で行う「島っ子ガイドフェスティバル」でガイドを行うために、調べ学習やシナリオ作りを通して、プレゼンテーションやコミュニケーションを学ぶ。島っ子ガイドは、2008（平成20）年11月に菅島小学校教員の廣川清治氏と筆者との問題意識から始まった。筆者は、海島遊民くらぶというエコツーリズムの事業を行っており、主に関西方面の小学生の修学旅行のプログラムを実施するために日常的に菅島を訪れていた。菅島小学校の児童は、離島の地理的条件により、知らない人との出会いが少なく、コミュニケーション力の向上において問題を抱えていた。そこで、菅島小学校と海島遊民くらぶの連携による「島っ子ガイド」の取組が始まったものである。「島っ子ガイド」は、コミュニケーション力の向上を目的に、主に総合学習の取組として始まった。そ

1) 第4次交通ビジョン(2018)、国土交通省交通政策審議会。

の後、総合学習のない低学年でも国語の時間を利用して取組が始まり、全校児童の取組となった。

③島っ子ガイドのシナリオづくりとコースづくり

1) 島っ子ガイドにおける菅島灯台のインパクト

「島っ子ガイド」のシナリオは、児童がそれぞれ「大好きな菅島（の宝物）」をたくさんリストアップし、その中から、自分の一番を絞り、一番である理由を明確にするとともに、その資源についての調査を行う。その後、伝えたいメッセージをどのように伝えと、参加者に楽しく伝わるかを工夫して、シナリオ作りを行う。それを、教室や現場で何度も練習する。その過程で、視察などの依頼を受けることで、フェスティバルに向け参加者を前にした実際の練習にもなっている。

「大好きな菅島」を絞った際に、どの学年でも必ず登場するのが菅島灯台である。開始当初の2009（平成21）年の3年生は6人中3人、4年生は10人中7人が宝物として菅島灯台をあげている。

2) 島っ子ガイドのシナリオとコース

毎年、フェスティバルでは3～5つのコースに分かれてガイドを行うが、リピーター客にも灯台に行けるコースが人気となっている。図3は、2011（平成23）年の島っ子ガイドフェスティバルのコースである。この年には、すべてのコースに菅島灯台のガイド案内が入っている。全校生徒で取り組むようになってからは、菅島灯台までの道のりが遠いため、1・2年生のコースには入っていない。

また、実際のシナリオの例として、表1に抜粋した。これを見てみると、小学校の建築デザインに灯台が取り入れてある様子、小学生が名付けた菅島灯台のゆるキャラの「すがちゃん」、灯台内に収めた卒業記念のタイムカプセル、灯台のための道づくりをしたおじいちゃんの話など、住民が菅島灯台とと

もに歩んできた地域の歴史のストーリーが語られている。

④島っ子ガイドの効果

この取組は、他校、他地域にも広がっている。学校での指導マニュアルができたことから、「島っ子ガイド」は、2015（平成27）年には鳥羽市立神島小学校、2016（平成28）年には鹿児島県の徳之島でも取り組まれるようになった。そして、2018（平成30）年度刊行の光村図書出版の小学6年生用の道徳の教科書で取り上げられた。

また、海島遊民くらぶが受け入れている公益財団法人国際交通安全学会（IATSS フォーラム）によるアセアン諸国からの研修生や笹川平和財団による太平洋島嶼国からのOJT²人材も、菅島の「島っ子ガイド」を体験し、強く影響を受け、自国での地域の啓発に取り入れられている。

灯台の保全と地域振興

島っ子ガイドでは、ここでは紹介しきれなかった、経済効果や子供たちの学力向上、住民にとっての誇りの醸成も含めて、多面的な効果が表れている。そして、紹介される彼らの宝物は、親の従事している漁業や町の商店など個人的な思い入れから選ばれることも多いが、その一方で、菅島灯台は、子供たちだけでなく、島民、みんなの共通の宝物として紹介されている。人口減少の昨今において、灯台との関わりを拡大させ、地域との関わりを深くしていくことで、本来の機能以上の必要性を生み出すことができるのではないか。灯台の観光利用では、地域住民との深い関わりから、訪問者と灯台の物語を作っていくことで、灯台を守り、伝える力を拡大し、灯台と地域の相互的な発展が期待できるであろう。



図4.IATSSフォーラムの研修生をガイドする菅島小学校の児童と鳥羽海上保安部職員(2016.10.20) 出所:海島遊民くらぶ

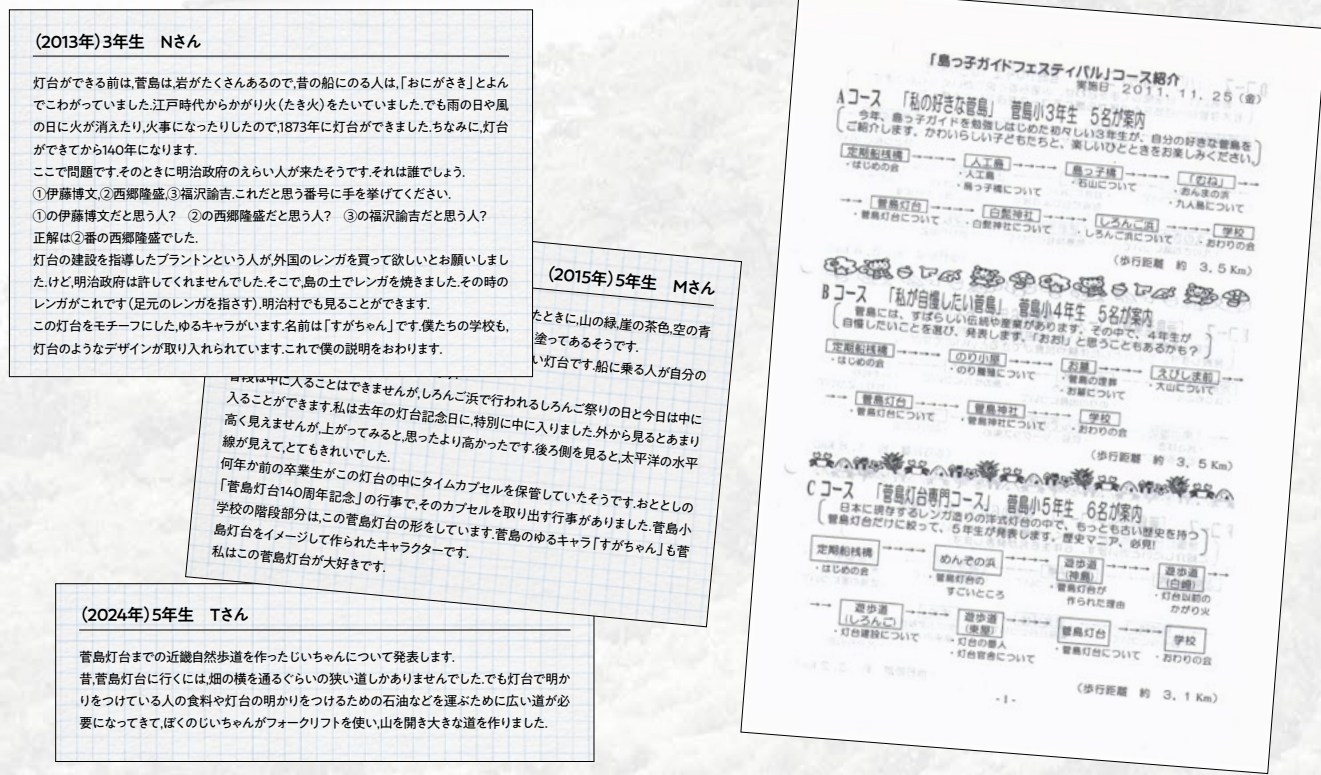


表1. 島っ子ガイドの菅島灯台シナリオ

図3. 島っ子ガイドフェスティバルコース紹介の案内表(2011年)

2) OJTとは、「On the Job Training」の略語で、海島遊民くらぶでは地域密着型観光の考え方やノウハウについて、実際の業務の中で研修生をトレーニングしている